

コモングッドとサステイナビリティ

Common Good and Sustainability

東北公益文科大学

Tohoku University of Community Service and Science

間瀬 啓允

MASE Hiromasa

[キーワード：公益、配慮、ステewardシップ、共生、地域コミュニティ]

[本文要約]

コモングッドは普遍的な善である。それは「よく生きること」への促しである。コモングッドは個々人の善よりも優先されるという意味で、公益である。しかし公益の実現のためには社会全体に対する配慮が欠かせない。配慮の倫理を根底に据えてコモングッドを促進させたのは、ヨーロッパ精神史上では、ギリシア起源のステewardシップであった。

人は大地との運命的な連続性のゆえに、大地に優しく配慮する「ステeward」である。ここに「共生」の積極的な意味がある。共生はエコロジカルな生き方の基本、モラルの根本である。この共生の視点からサステイナビリティを追求するならば、未来世代に対する現世代の配慮が欠かせない。これは現代倫理における「世代間倫理」の問題である。この問題を含みつつ、地域コミュニティの再生について、共に考えてみたい。

[Summary]

Common Good is a universal good. It is a lure to 'live well'. Common Good faces on Koeki (public interest) in the sense of its priority to individual good. To actualize Koeki, however, there must be a tender care of the whole of community. In the European history of mind, it was the Greek origin of stewardship that promoted Common Good laying care ethic as its basis.

Humans are best conceived as 'stewards' who lay tenderness on the earth, because they are continuum to the earth. Here is a true meaning of 'symbiosis', which is the basis of an ecological way of human life. If the pursuit of sustainability should be made from this viewpoint, there must be a good care of the future generation by the present generation. Including this issue, we share views on the problems of local community.

はじめに

コモングッド (common good) は「だれにとっても」(common)「よい」(good)といわれるもの、つまり万人に開かれた普遍的な善のことである。例えば、公共の福祉は社会全体の福利に配慮するという意味で「コモングッド」である。普遍的な善としてのコモングッドは、「よく生きること」への促しである。古代ギリシアのプラトンやアリストテレス以来、コモングッドは人間の社会生活における理念とされてきたものである。

コモングッドの理念には、社会全体の目的は倫理から切り離されてはならないという主張が込められている。倫理は個人倫理から社会倫理まで広範囲にわたるが、個人倫理がそのまま社会倫理として通用するわけではない。例えば、個人の正義感とはしばしば正義であるよりは復讐感情であって、それがそのまま社会正義の基準とはなりえない。しかし人間社会の歴史を振り返ってみるならば、社会生活の中のさまざまな要求は、多くの場合、倫理的な要求に応えたものになっていることが分かる。例えば生産と分配、所有と安定といった社会的な要求は、正義と自由、参加と連帯といった倫理的な要求に応えたものとなっている。人間の社会生活の根本には、コモングッドの理念が働いているからである。

コモングッドと公益

コモングッドは個々人の善よりも優先されるという意味で、「公益」と呼びうる。例えば、創意工夫によって推進される共同募金制度や、人々の間に新しい交流をもたらすボランティアの働きは、「公益のため」と言いうる。なぜなら、そうした活動の根底には「社会全体を配慮する」という精神が込められているからである。公益は「公共の利益」、即ち社会全体の利益ということである。しかし社会全体に利益をもたらすためには、社会全体に対する配慮が欠かせない。配慮を伴う責任というものがなくては、公益はこの社会に実現されないだろう。例えばプラトンの対話編『パイドロス』の中には、「魂なきものの全体を配慮することが、魂あるもののいずこにもおける責任である」と説かれている。また、別の対話編『国家』では、「支配者として彼の責任は、もっぱら支配を受ける側の者たちの利益に対してであって、けっして己の利益に対してではない」と明言されている。このように、支配には「配慮を伴う責任」ということと「支配を受ける側の者たちの利益のために配慮する」ということが肝要である。

配慮の倫理

「配慮」というこの精神は、ギリシア起源の「スチュワードシップ」(stewardship)であるが、これは後にキリスト教世界の中で展開され、キリスト教のスチュワードシップ、即ちキリスト教の「信託精神」といわれるものになる。つまり、「配慮」の精神は「信託」の精神として定着するのである。この精神の下では、あらゆる所有が人間の手に「信託されたもの」と理解される。例えば、富の所有は人間の手に信託された賜物であり、これを預かる者に大切なことは貧しい人々への配慮であった。聖書の生活世界では、配慮の徹底として「共有制度」があった。この制度の下で、人々は自らが所有の信託者(スチュワード)として、困難や貧しさに直面している人々への配慮を怠ることがなかった。これが配慮の倫理としてビブlical・スタンダードとなったのである。

共有の形態は、今日でも修道院や信仰共同体に保持されている。そうした場所では、いまでも配慮の精神を生かすことによって社会全体の福祉に役立てていこうとする運動が続けられている。私利私欲を離れて利他主義の立場に立ち、欲求の源を自己から他者へと転化させる。こうして他者への気遣いや思いやりを徹底させていこう、また同時に、この気遣いや思いやりを社会の福祉にまで結びつけていこう、とするのである。

したがって、ヨーロッパの精神史でいわれるスチュワードシップは、現代では公益精神として理解することができるのではないか。「配慮の倫理」を根底に据えて、この精神史上のスチュワードシップはコモングッドを促進させるからである。また同時に、スチュワードシップは近代社会における所有中心の個人主義の考え方とも全く異なるからである。現代の倫理的課題として問われる「自然に対する人間の責任」とか、「生命に対する人間の責任」とか、「次世代に対する現世代の責任」という場合の「責任」は、「他者への配慮」とか、「社会全体への配慮」ということを意味する。したがって、所有ではなく配慮を中心とするスチュワードシップは、いま私たちが生きているこの時代では、公益精神として十分に意味をなすものと考えられる。

エコロジカルな生き方の基本、モラルの根本

自然は「大きないのち」である。私たちは皆この「いのち」によって、生かされて生き、動き、かつ存在している。この「大きないのち」の占める場所は大地であり、地球である。その場所において、私たちをも含むさまざまな生命体が相互依存的に、相互関連的に支え合って生きている。その場所では、あらゆる生命体が不可分の関係にあるから、生命的な

存在連鎖のゆえに、生命中心のエコシステムが成り立っているといえる。したがって、人と人だけでなく、人と自然の間にも共通の存在意義が生じてくる。ここに成立するのがエコロジーでいう「共生」という考えである。さらに、「共生」へと促すものは生命中心のエコロジカルな価値観である。この価値観のもとで、自然との繋がりを回復する癒しの思想、ヒーリングの思想が成り立つ。「ヒーリング」のもともとの意味は、「ばらばらな部分が一つの全体になりきることであった」からである。

キリスト教もまた「共生」を抜きにしては語れない。キリスト教の創造物語によれば、人は神に似せてつくられた。つまり「イマゴ・デイ」(imago Dei、神の似像)である。したがって人には独自性がある、固有性がある、といわれる。これは人として生きる存在の意味を神との関わりにおいて物語ることを意味する。しかし人は土から生まれ、土を耕し、土に帰るものとしてつくられた。ここに大地との連続性、自然との連続性がある。これは人として生きる存在の意味を他の生命体との運命的な連帯性において物語ることを意味している。したがって人間の固有性と自然との連帯性は表裏一体の関係であって、この関係のもとで環境や共生を論じることが現代のキリスト教思想では重要になっている。そして自然の中の他の生命体と連帯しつつ自らに課せられた責任を果たすということが、人間の重要なあり方として問い直されている(芦名定道『自然神学再考—近代世界とキリスト教—』晃洋書房 2007)。

こうした問題意識の下で、いまキリスト教思想においては、人は「地の支配者」ではなく、「地の僕」として理解されている。つまり、大地に配慮し自然の世話をする「神のステュワード」として、新たに理解しなおされているのである。確かに、人はこの大地に生み育てられ、他の生命体と共生し、運命的な連帯性のもとにある。したがって、この新たな自己理解の下で、人は新たな生き方へと向かわせられるのである。例えば、現代ポーランドの哲学者スコリモフスキーは、エコフィロソフィの立場から、「世界は聖所として認識されるべきである」と言う(Henryk Skolimowski, *Living Philosophy: Eco-Philosophy as a Tree of Life*, Penguin Books, London, 1992. 邦訳『エコフィロソフィー—21世紀文明哲学の創造—』法蔵館 1999)。人には、世界はかけがえのない住処であり、精神的滋養の源泉である。それゆえ、野鳥保護区の稀有な野鳥のように、世界もまた大切に保護されなければならない。その意味で「世界は聖所」なのである。畏敬の念を抱き、聖性を維持し、霊性を増大させることができるのは、この聖所においてである。人は、まさしくこの意味において、「聖所の司祭」「神のステュワード」なのである。

スチュワードシップの涵養

現代アメリカのエコロジー神学者サリー・マクフェーグは、「世界は神の現臨の場である」「宇宙は神のからだである」と言う(Sallie McFague, *The Body of God: An Ecological Theology*, SCM Press, 1993)。マクフェーグのエコロジカルな感性は、神学に対して、ナザレのイエスとの関係において受肉を相対化し、宇宙との関係において受肉を最大化することを要求する。こうして救済圏を拡張し、自然界をも包摂できるようにするのである。このように神の現臨を最大化して理解することは、人間だけが神の救済行為に関係するのではなく、被造物全体が神の救済に与るように招かれている、という認識へと導く。何もかも神に見捨てられることはない。これが、神の現臨の場という意味において宇宙が「神のからだ」(the Body of God)といわれるゆえんである。キリスト論からすれば、これは「宇宙的キリスト」(Cosmic Christ)の原意であろう。

キリスト教の神は創造と受肉の神である。創造 (creatio) において自然を超越するが、受肉 (incarnatio) において自然に内在する。神は人となって「この世に満ち満ちるもの」となったのである。ここに sacramental なロゴスの成立する根拠がある。自然物は聖化され、神の心を物語る。例えば、キリスト教徒が水によって洗礼を受けるとき、あるいはパンとぶどう酒をキリストのからだ、キリストの血として拝領するとき、自然物の中に sacramental なものを感じ取る。目に見える自然的要素を通して目に見えない神の恩寵、神の恵みを享受するのである。そこで、ホワイトヘッドのプロセス思想に共鳴する現代イギリスの生物学者、アーサー・ピーコックは、「創造は神の中のこの自然的世界において継続されている」と主張する (Arther R. Peacocke, *Creation and the World of Science*, 1979. 邦訳『神の創造と科学の世界』新教出版社 1983)。創造と受肉の神は世界の全プロセス「において(in)、とともに(with)、のもとで(under)」現臨している。それゆえに、世界の全プロセスに対して尊敬と畏敬の念が求められるのである。自然的世界の要素は神の内在的な創造活動のゆえに神鑽仰の礼拝に加えられる。こうして物的世界は神聖視され、「存在への畏敬」の念を呼び覚まされるのである。

こうした例証を踏まえて考えてみるならば、自然的世界に対するスチュワードシップの涵養はエコロジカルな生き方の基本であり、モラルの根本であると言えるのではないか。それは実践的な生物学者であるエコロジストのものであり、また環境倫理の基礎的原理を提供するものでもあると考えられる (R.J. Berry (ed.), *Environmental Stewardship: Critical Perspectives - Past and Present*, T&T Clark, London, 2006)。

サステナビリティと簡素な生

よく知られているように、「現代人は所有中毒にかかっている」という驚くべき診断を下したのは、アメリカの社会心理学者エーリッヒ・フロムであった（Erich Fromm, *To Have or To Be?* 1976. 邦訳『生きるということ』紀伊国屋書店 1977）。何でもかでも自分の手の中に持たなくては気がすまないのが現代人である。これは「肥えたブタ」、つまり量をむさぼり肥えふとる愚者の姿である。ちなみに言えば、「幸せな中流家庭の持ち物調査」という奇抜な社会調査がある。子ども二人のハッピーな四人家族の持ち物調査である。大きい持ち物、小さい持ち物、すべてを庭に持ち出して数えてみると、アメリカのハッピーな家庭は5200点、インドは僅か22点、日本は何と8000点に及んだという。この調査から分かることは、「持つこと」「所有すること」と、「幸せである」「幸福である」ということとの間には相関関係がないということである。日本人が追い求めてきた豊かさ、幸せというものは、単なる所有欲に繰られた物量だったのである。

同じ頃、イギリスの経済学者シューマッハーは「スモール・イズ・ビューティフル」ということを言って、極端に巨大化した物質中心の経済を批判し、これに代わるものは仏教経済学であると主張した（E. F. Schumacher, *Small Is Beautiful*, 1973. 邦訳『スモール・イズ・ビューティフル』講談社学術文庫 1986）。仏教は持つこと、所有することを否定しない。しかし所有は最小限に抑えて、そこから最大限の幸福感を引き出していく。その精神性にシューマッハーは着目し、現代人の経済的関心を、暮らしの量から質へと転換させようとしたのである。そうすることによって、大量生産・大量消費・大量廃棄・大量資源の収奪という現代人の大量志向に歯止めをかけ、来るべき時代のニーズは経済成長ではなく、サステナビリティであることを先駆的に示唆したのである。

「サステナビリティ」は簡素な生の形態に結びつく。現代の流行語で言えば、ロハス（LOHAS: Lifestyles Of Health And Sustainability 健康と持続性に配慮したライフスタイル）であろう。世の賢者は「少欲知足」を旨とし、簡素な生に向かう。ちなみに言えば、物質中心の科学的発展の傍流にはいつも簡素に生きようとする人びとがいた。環境思想の先駆者ソローやエマソン、キリスト教の小教派であるクエーカーやアーミッシュ、メノナイトの信者たちはみなそうであった。彼らは近代アメリカの、モノ・カネ中心の資本主義に抵抗して、自給自足の生活を美德とし、できるだけ自然な生活を保持しようとした。言うならば、彼らは「肥えたブタ」ではなく、「痩せたソクラテス」であった。簡素な生の形態の中に暮らしの質を高め、簡素に生きようとする賢者たちであった。

「他者問題」と地域コミュニティ

現代の倫理的課題に、「世代間倫理」がある。これは次世代に対する現世代の責任の問題、未来の見知らぬ他者との関係の問題、つまり「他者問題」である。一般化すれば、人と人との共生はどうあるべきか、という重大な問題である。これは環境問題でいえば、現世代が加害者になり未来世代が被害者になるという由々しい問題である。地球の大気圏が汚染されても、核廃棄物を残されても、石油や石炭を使わなければ動かない機械を山ほど作って、肝心の地下の石油や石炭を空っぽにされても、未来世代は何一つ文句が言えない。それでいいのか、という深刻な問題である。この問題に対処するためには、未来世代に対する現世代の配慮が欠かせない。現世代は「自分さえよければ」というアトミスティックな個人主義、自由主義の立場から離れて、未来世代の見知らぬ他者に対して共感 (sympathy: sym + pathos 共感) を取り戻さなくてはならない。その共感が他者との共苦に向かわせ、自己の生き方に影響を及ぼし、真の意味での「共生」 (symbiosis: sym + bios 共生) への強い促しとなるだろう。このようにして、他者への配慮を基盤とした「共生」というあり方が構築されていかねばならないだろう。

未来の他者との共生という視点からサステナビリティが追求されるならば、それは同時に、同時代における見知らぬ他者との関係からも問われることになるだろう。仮に途方も無い代替エネルギーが開発されて、自然環境が首尾よく保全されたとしても、一部の人のによって多数の他者が支配されたり、抑圧されたりするならば、それはけっして許されるべきことではない。したがって、同時代と未来世代の他者との関係の双方を、共感と配慮に基づく「共生」の観点から熟慮し、人と人との望ましい共生の関係が構築されていかねばならないだろう。

人と人との望ましい共生の関係は、地域コミュニティに求めることはできないか。日本の伝統精神では、地域コミュニティの維持と発展ということが非常に大事にされてきた。例えば、神道古典では、地域コミュニティの生活と発展にとって不利益となり、あるいはそれを阻害するものは罪であると考えられていた。具体的には農耕妨害、傷害、殺人、病気、近親相姦、性の逸脱、災害、呪いといった類のものを指していた。日本の村や町のどこにでも、神社仏閣は無数にある。祭りやさまざまな年中行事からも分かるように、どの地域にもそれぞれの中心に神社や寺がある。それなのに地域コミュニティの感覚が薄れ、地域の一体感が希薄になってきていると憂慮されている。何故か。

思うに、昨今のモノ・カネ中心の市場原理に惑わされて個人主義や自由主義に走ってし

まい、「自分さえよければ」という自己中心の考えから自分を孤立させ、地域との一体感を薄いものにしてしまっているのではないのか。そうであるならば、地域コミュニティの再生を図らねばならない。新しい「つながり」の原理を作っていかなければならない。象徴的な言い方をすれば、「鎮守の森」のような存在、つまり地域コミュニティの中心にあるものを再生しなければならない。では、その再生の方途はどこに、どのようにあるのだろうか。

おわりに

大阪に「應典院」というユニークな寺がある。この寺では葬式をしない。何をするのかというと、劇場型の本堂ホールや研修室でミニコンサートやミニレクチャーをして、教育や福祉、芸術文化の活動をする。「寺は寺のためにあるのではない。広く市民、住民のためにある。寺の活動の原点は‘学び・癒し・楽しみ’である。」と言って、住職の秋田光彦師は寺と社会、寺と地域コミュニティとの新しい関係を紡いでいる。さらに、最近では地域の NPO と連携して、地域のニーズに応じた多様な公益というものを共創しようと励んでいる。こうした取組みは、「地域コミュニティの再生」が単なる地域の伝統・慣習への懐古・復帰ではなく、常に流動・変化する社会への冒険・挑戦であることを物語っている。

ちなみに言えば、私の大学のキャンパス内には行政から管理運営を委託されている「公益ホール」という立派な建物がある。そのホールでは講演会や研修会のほか、たびたび市民交流ミーティングを開いて、広く市民、住民を「むすび」「つなぎ」、多様な人びとの「つどう」場となっている。私はこのホールの二階ロビーに「哲学カフェ」を開き、新たな知をひらく冒険と、それを通して地域コミュニティの再生の可能性をさぐるという、ささやかな挑戦を試みている。そこで、「いま、地域コミュニティの再生は可能か」ということを、皆さんと一緒に考えてみたいのである。